

中国生乳販連 一部大手乳業者から ” 飲用乳価5円値上げの提示”

乳価値上げに併せてどの様な行動が必要でしょうか？



中国生乳販売農協同組合連合会(東山 基代表理事会長・以降「同連」という)は、平成二十五年年度の乳業各社との乳価交渉にあたり飲用並びに発酵乳用途において、去る三月二十八日の同連理事会で生乳1kg当たり七円の乳価引き上げを決定し、管内の酪農家を襲う経営環境の窮状理解にたつて乳業者との交渉に入りました。

七月に入り大手乳業者から飲用取引乳価の価格改定がマスコミにより報道されました。

この報道を受けて、今後どの様にして酪農家の生活安定を支えて行くかを一緒に考えて戴きたく、関連する情報(データ)を提示しますので、この件に関するご意見やご要望などありましたら、本誌最終頁に掲載するメールアドレス宛に送信若しくは電話等によりお聞かせ戴きたいと考えます。

一・中央酪農会議「酪農乳業関係専門誌」との懇談で乳価値上げの情勢認識

七月二日午前、(一社)中央酪農会議は、酪農乳業関係専門誌との懇談で「全

国的に十月分からキログラム当たり五円引き上げの方向が固まりつつある」との情勢認識を示し、その後の状況は翌日の各社新聞で報じられました。

この報道は、酪農家が両手を挙げて期待する乳価交渉結果とは云えない現実にあります。各乳業者側にとつては、デフレ現象のもとで消費者の財布の紐が固いことや、市場競争原理に晒され、商品製造原価のアップ分をなかなか小売価格に転嫁出来ないジレンマも生じています。

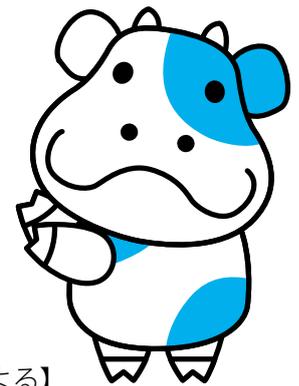
二・中国生乳販連「飲用乳価五円はやむなし」

同連は七月三日、生乳受託販売委員会、理事会を開催し大手乳業三社から提示の飲用用途向け取引に限る五円の値上げと、その改定時期は平成二十五年十月からとすることをやむなしとする考えのなかで発酵乳用途の値上げに向けての交渉を継続し行うことを決定し、七月末日迄に同管内の中小乳業者約三十社との乳価交渉を終えるよう積極的に取り組んでいます。

1 平成 24 年度下期の生乳販売実績及び平均乳価実績

(下記表の取引構成率の端数は全て未調整)

用途別販売	取引数量	取引構成率	平均価格
①飲用向け	94,256 トン	64.5%	107.3 円
②学乳向け	12,842 トン	8.8%	120.0 円
③発酵乳等向け	25,954 トン	17.8%	95.0 円
④生クリーム向け	6,092 トン	4.2%	89.5 円
⑤チーズ向け	223 トン	0.2%	63.0 円
⑥加工向け	6,811 トン	4.7%	71.0 円
合 計	146,178 トン	100.0%	103.7 円 ①



2 乳価値上げ後の想定【※ 平均価格は、脂肪率 3.5%・無脂乳固形分率 8.3% 基準による】

想定 1

飲用取引乳価が 5 円の値上げと仮定し、平成 25 年度下期生乳販売数量実績において前年度同様の取引構成率であった場合の生乳 1kg 当たりの取引平均乳価は、前年度実績の 103.7 円から 3.27 円/kg の値上げと想定できます。

用途別販売	取引数量	取引構成率	平均価格	乳量前年比
①飲用向け	92,654 トン	64.3%	112.3 円	98.3%
②学乳向け	12,800 トン	8.9%	120.0 円	99.7%
③発酵乳等向け	26,473 トン	18.4%	95.0 円	102.0%
④生クリーム向け	5,480 トン	3.8%	89.5 円	90.0%
⑤チーズ向け	220 トン	0.2%	63.0 円	98.7%
⑥加工向け	6,470 トン	4.5%	71.0 円	95.0%
合 計	144,097 トン	100.0%	107.0 円 ②	98.6%

※ 平均乳価上昇想定額 → 3.27 円 ② - ①

想定 2

飲用取引乳価が 5 円の値上げと仮定し、前述の想定 1 に示す飲用取引数量が 1 割減少し発酵乳等向けが半々増加の場合の生乳 1kg 当たりの平均乳価は、前年度実績の 103.7 円から 1 円 39 銭の値上げになると想定されます。

用途別販売	取引数量	取引構成率	平均価格	乳量前年比
①飲用向け	83,389 トン	57.9%	112.3 円	88.5%
②学乳向け	12,800 トン	8.9%	120.0 円	99.7%
③発酵乳等向け	31,106 トン	21.6%	95.0 円	119.9%
④生クリーム向け	5,480 トン	3.8%	89.5 円	90.0%
⑤チーズ向け	220 トン	0.2%	63.0 円	98.7%
⑥加工向け	11,102 トン	7.7%	71.0 円	163.0%
合 計	144,097 トン	100.0%	105.1 円 ③	98.6%

※ 平均乳価上昇想定額 → 1.39 円 ③ - ①

想定 3

飲用取引乳価が 5 円の値上げと仮定し、前述の想定 1 に示す飲用取引数量が 1 割減少し、この減少量が加工向け取引となった場合の生乳 1kg 当たりの平均乳価は、前年度実績の 103.7 円から 62 銭の値上げになると想定されます。

用途別販売	取引数量	取引構成率	平均価格	乳量前年比
①飲用向け	83,389 トン	57.9%	112.3 円	88.5%
②学乳向け	12,800 トン	8.9%	120.0 円	99.7%
③発酵乳等向け	26,473 トン	18.4%	95.0 円	137.7%
④生クリーム向け	5,480 トン	3.8%	89.5 円	90.0%
⑤チーズ向け	220 トン	0.2%	63.0 円	98.7%
⑥加工向け	15,735 トン	10.9%	71.0 円	95.0%
合 計	144,097 トン	100.0%	104.4 円 ④	98.6%

※ 平均乳価上昇想定額 → 0.62 円 ④ - ①

(下記表の取引構成率の端数は全て未調整)

想定4

飲用取引乳価が5円の値上げと仮定し、前述の想定1に示す飲用取引数量が1割減少し、この減少量が発酵乳等向け取引となった場合の生乳1kg当たりの平均乳価は、前年度実績の103.7円から2.16銭の値上げになると想定されます。

用途別販売	取引数量	取引構成率	平均価格	乳量前年比
①飲用向け	83,389 トン	57.9%	112.3 円	88.5%
②学乳向け	12,800 トン	8.9%	120.0 円	99.7%
③発酵乳等向け	35,738 トン	24.8%	95.0 円	137.7%
④生クリーム向け	5,480 トン	3.8%	89.5 円	90.0%
⑤チーズ向け	220 トン	0.2%	63.0 円	98.7%
⑥加工向け	6,470 トン	4.5%	71.0 円	95.0%
合 計	144,097 トン	100.0%	105.9 円 ㊦	98.6%

※ 平均乳価上昇想定額→2.16 円 ㊦-㊦A

想定5

飲用取引乳価が5円の値上げと仮定し、前述の想定1に示す③発酵乳等向け取引から⑥の加工向け取引の全量が、①の飲用向け取引となった場合の生乳1kg当たりの平均乳価は、前年度実績の103.7円から9.25円の値上げになると想定されますが、しかし、これは、現状の市場における消費者動向から参酌しても極めて現実味に乏しいものと考えますが、酪農家の思いとすれば、生乳1kg当たりの生産にかかるコストは同じであることから、用途別販売において少しでも平均価格が高値の取引になるよう中国生乳販連による努力に期待するものであります。

用途別販売	取引数量	取引構成率	平均価格	乳量前年比
①飲用向け	131,297 トン	91.1%	112.3 円	139.3%
②学乳向け	12,800 トン	8.9%	120.0 円	99.7%
③発酵乳等向け	0 トン	0.0%	95.0 円	0.0%
④生クリーム向け	0 トン	0.0%	89.5 円	0.0%
⑤チーズ向け	0 トン	0.0%	63.0 円	0.0%
⑥加工向け	0 トン	0.0%	71.0 円	0.0%
合 計	144,097 トン	100.0%	113.0 円 ㊦	99.0%

※ 平均乳価上昇想定額→9.25 円 ㊦-㊦A

三. 今後は様々な難局に対して

どうやって行動をすべきでしょうか？

同連には、引き続き乳価交渉に向け全力で取り組まれ酪農家が将来を悲観し離脱することの無いような取り組みを期待し、

た。T P P 参加は、酪農業のみならず様々な国内需要に依存する産業分野に大きな打撃を与えることは必至です。

広酪内部では六月二十六日の理事会により決定した新役員体制のもとで、代表理事の方針のもとに組合員(酪農家)のことをより一層意識し、かつ農協法第八条に定める事業を通じた最大の奉仕にあたることを肝要と考えております。

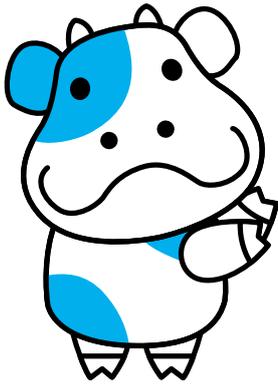
来る七月三十一日には、日本酪農政治連盟による「日本酪農を守る・全国酪農民大会」が開催されますが、広酪も前述のことを意識するなかでこの主旨に賛同し行動にあたる予定であります。

こうした考えにたちまして、アベノミクスの影響による急速な円安誘導から輸入粗飼料、輸入穀物相場の高騰が、酪農経営を直撃する問題の解消、将来不安の払拭を訴える行動を日本酪農政治連盟等とともにあたり、国による緊急支援救済施策(所得補償等)の実現を求める行動が必要と考えます。

最後に、平成二十五年度乳価がまもなく決定されようとしていますが、為替相場はドル百円前後で推移し、配合飼料価格は有史以来最高値のトン当たり六万七千九百円になっており今後不安が過ぎりますが、酪農家、酪農組織としても乳価値上げ分が末端小売価格への転嫁が得られるよう理解醸成に努力し、安心して酪農業が営まれるよう英知を結集し取り組むべきと考えますが、如何でしょうか。諦めないで・・・。

また、三月十五日の安倍総理によるT P P 参加表明からT P P 参加交渉が始まりました。

よう英知を結集し取り組むべきと考えますが、如何でしょうか。諦めないで・・・。



6月28日 中国生乳販連が地方紙(新聞)に掲載した広告

七月五日、広島市内の広島県民文化センターにおいて「TPPについて考えるシンポジウム」が開催され、「TPP参加は本当に大丈夫?」とするリレートークや鈴木宜弘東京大学大学院教授による「TPP交渉参加と国益の破綻について」と題した講演が行われ、TPPは日本国民にとって「失うものが最大で、得るものが最小な史上最悪の選択肢」として大きな警笛を鳴らされました。これに関する情報は次回掲載を予定したいと考えていますが、酪農家の皆さんも、再度、TPPの本質を見極めて戴き次世代に引き渡す日本国家の在り方・姿を創造してほしいものです。

四. 次世代に引き渡す日本国家の在り方・姿の創造を



○今月の表紙

- ▼今月の表紙写真は謀太大学保育学科の「保育祭り」会場入り口にかけて、彩りを添えたイラストに目がとまりショットした。
- ▼この祭りは、今年四十回目、実に四十年の歴史があるそうです。
- ▼将来の保育士等を志す仲間達が歌や踊り、影絵を発表し会場につめかけた約二千人の観客を魅了し、歌や踊りに併せて手拍子で沸いた。
- ▼まるでテレビ某局の「おかあさんといっしょ」のように映り、プロに劣らぬ演出と感動した。
- ▼学生約百二十名は、音響、小道具、演出など各分担し、四月から丸三カ月間、毎日夜遅く迄、お稽古に励んだそうだ。
- ▼ファイナーレでは、仲間と肩組み、美しい感動の涙に溢れる姿を目



にし、仲間との絆が深まる場面に少々胸が熱くなりグッときた。酪農業においては、様々な理由があるなかで、毎年、仲間の減少が続いているが、再度、「仲間」を意識する機会を得たような気がした。